第 2019-39 号

恵みと真理のニュース

2019 年 09 月の五次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

[証]

私の足首を掴んでくださって、膝まずくようにして腰を掴んでくださった神様、感謝します。

神様を畏れる旦那と結婚するまで、私は実家の家族は信仰と距離が遠かった人々でした。三十歳になるまで聖書を一度も読んでなかったし、教会に一回も行った事がなかった私が神様を信じる旦那に出会って結婚して子供を産んで神様を知り信じるようになりました。私を知っていた人々は奇跡だと言えますが、このすべてが神様がわたしのため準備して与えてくださった恵みであり、愛であることを信じます。結婚するとき旦那は私にイエス様を信じなさいと強く勧めたり、教会に行こうと強要しないようにと約束しました。この約束が旦那との結婚を決心するときに大きかったです。旦那はその約束を守って私に信仰生活を強要しませんでした。もちろん結婚生活で夫婦の間で全く言い争いがないとは言えません。私たちの夫婦にも言い争いがある時神様を信じる旦那は私の意見が無理でも理解して我慢しようと努力しました。そのような旦那が私が主日に教会に行かないのが心が痛かったので一人で神様に祈ったことを後で知るようになりました。一人で教会に通いなさいと私が言いましたが旦那一人では教会に行かなかったです。そうしながらいつも鬱になって家庭で良いことがあってもよく笑わなかったです。その日が繰り返すある日、私が教会に行こうと決心しました。旦那の姿が以前のように健康で明るくなったらいいなと思いました。また、イエス様がどんな方で教会がどんなところが知りたい好奇心が出来ました。私が旦那をついて恵みと真理教会を通い始めると旦那の顔が明るく変わりました。世を全部得たように喜んでいました。その時まで、私が教会に通うことや聖徒になるのがどんな意味になるか知らなかったです。その時にわたしは会社で大変な事があっても我慢しながらもして、それによってストレスと心と体が倒れて家に帰って来るとすぐ疲れてしまいました。さらに、母が癌で世を離れて私は心を置くところがなかったです。会社を辞めて家で療養をしようと思いました。会社では妊娠しようと言い訳をしました。その時はそんなに子供を持とうとしなかったです。ところが、会社を辞めてみたら私の年取ったし 結婚してけっこう時間が経ったので家族が子供を願っているのを悟るようになりました。子供を願わなかったのではないですが、今まで私が子供を持つことには消極的だったのを知りました。会社を辞めた理由でしたが、これからは頑張って子供を持つようとしました 。そのように決心したら焦ました。三十六歳の少ない歳だったので体に良い漢方薬を飲んで、病院でも関連する相談と診療も受けてみました。そうしながら、もしかして妊娠できなのではないかと不安にもなりました。自然に教会に行って熱心に神様に祈るようになりました。“神様！私の夫婦に子供を与えてください。助けてください。”と祈りをするたびにわたしも知らずに涙を流しました。初めて教会の礼拝に参席したとき叫びながら祈りをする聖徒の姿を見て奇異に思っていました。ところが、ある日から私がそんなに切なく神様に祈っていました。そして、このような祈りの中で子供を妊娠して、尊く双子を産みました。しかし、この子供たちを育てながら肉体的にも精神的にも大変で教会に行って礼拝をして神様に祈ることを疎かにするようになりました。教会には行きますが、母子の礼拝室で遊んで回っている子供たちに気を使ったので心を尽くして礼拝を捧げるのが大変でした。何よりも党会長の牧師の説教を集中して傾聴することが出来なくて残念でした。体が疲れると主日礼拝に休む時もいました。
そのような私を見てかわいそうに思った幼稚部の先生から勧められて二歳もなってない子供たちを幼稚部で送りました。初めは母と離れたくないと泣いた子供達も一回二回くらい幼稚部に通って先生と仲良くなり、 年上の子供達と仲良くなって自然にイエス様と聖書に出る話をするようになりました。そんな子供たちを面倒をみながら悩みが出来ました。これから正しく深い信仰を与えて神様の御言葉とイエス様の愛で子供をよく養育するかと恐れるようになりました。自分の進行が足りないのにどうやって子供達を教育させるか自信がなかったです。もっと悪くなって混乱している世の中で子供達を私利分別力があり、正しい行動をする人でどう導くか悩みました。そうする中で教会で同じことで悩んだお母さんに出会って話すようになり、一緒に悩んで祈るため区域の集まりに参与するようになりました。区域長と聖徒達が交流をしながら多くのことを習い悟ることが出来ました。わたしより先に子供を産んで育てる方に有益な経験と知恵を得られてよかったです。子供達をもっと愛し正しい性品で教えて育てるか共にいのることが楽しかったです。
そのように教会と教区で聖徒達との交流が多くなり自然に奉仕をする機会が出来ました。疎かにした聖歌隊ももっと成長した信仰で再び奉仕するようになって足りないですが、児童区域長の職分を受けて子供を仕え教えるようになりました。まだ、私の信仰が足りないですが、教会を仕え子供達を仕える奉仕をしながら日々神様が恵みを与えてくださったので私の信仰が充実になるのを悟り、信仰生活が正しい方向で発展していることを信じ熱心に奉仕しています。帰ってみると、神様は私を愛して下さり、私の歩みを世ではなく神様の子供にしてくださり、子供たちのため、膝をまずいて祈ってくださり、神様をもっと知り堅固な信仰を持つようにしてくださった主のため献身奉仕するように私の腰を強く握って導いてくださいました。私を呼んで新しく生まれ変わるようにしてくださった、ことに深く感謝して礼拝をし福ある生活をするようにお働いてくださった神様に感謝と賛美を捧げます。神様がこれから相変わらず愛を家族に与えてくださって、御言葉と聖霊で私を導いてくださって完全な神様の子供として生きるように祈ります。

[信仰コラム]

どんな人になるのが敬虔なのか？

”...あなたがたは，どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょう。そのようにして，神の日の来るのを待ち望み，その日の来るのを早めなければなりません。”（ペテロの第二の手紙3:10～14）

人が生活の理由と目的を知らずに生きていく技術だけを得るとしたら決して幸福で成功的な生活を生きることができません。何で生きるのかを知るべきです。何で生きるのかを知るとどのように生きるかを知るようになります。”何で生きるのか”、”どのように生きるべきか”という質問は”どんな人になるべきか？”という質問の中に入っています。私達は自分に”私がどんな人になることが当たり前か？”という質問をすべきであり、必ず聖書的な答えを持っていなければなりません。
第一、救いを得た人になるべきです。
人は救いを得られないと生まれた日が呪いの日であり一生が空しくなります。救いの道は聖書に掲示されています。神様は罪人を救うために独り子をこの世にお送りなさいました。十字架につけられて贖いの死を死なれるようになさいました。誰でもイエスキリストを自分の救い主として信じて迎接すると罪の許しを得て正しくなり、とこしえの命を得て神様の子になり天国に入って永遠に福楽を享受するようになります。救いを得た人になったという幸福に比べられることはありません。
第二、主を喜ばせる人になるべきです。
コリントの人への第二の手紙 5 章 9 節に”そういうわけだから，肉体を宿としているにしても， それから離れているにしても，ただ主に喜ばれる者となるのが，心からの願いである”としました。ヘブライ書 11 章 6 節には神様を喜ばせる信仰を二つの様相で大別しておきました。神様がおられることを信じる信仰と、神様は自分を探す者達に賞を与えてくださる方であることを信じる信仰です。神様がおられるのを信じることは信仰の初歩です。そこから神様の属性を知って信じる信仰で前進すべきです。
神様は御自分を探す者に賞を与えてくださる方です。神様を探すということは神様に求めることを意味します。悔い改める者に施してくださる神様の許しが賞です。病んだ者には神様に癒しが賞です。悲しい者には聖霊様の慰めが賞です。挫折した者には神様がくださる望みが賞です。無能な者には神様がくださる能力が賞です。知恵を求める者には神様がくださる知恵が賞です。奇跡的な問題解決が神様の賞です。天の国からくださる賞もあります。
第三、主の事に常に励む人になるべきです。
コリント人への第二の手紙 15 章 58 節に”だから，愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず， いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては，あなたがたの労苦がむだになることはないと，あなたがたは知っているからである”としました。イエス様は聖徒達に聖霊を送ってくださり教会が立てらせました。教会は聖徒達が主の事を効果的にして熱心にするようにする働き場です。聖徒達が協力して主の事をさせる所です。主の事をしないようにする妨げがあるので固く動かされてはならないとしました。時間を大事にする最も卓越な方法が主の事に励むことです。主の事に励む時に矢のように流れる時間を永遠な価値と意味を加えるようになります。
第四、神様の日が臨むを眺めて懇切に慕う人になるべきです。
ペテロの第二の手紙 3 章 12 節に”極力，きよく信心深い行いをしていなければならない。その日には，天は燃えくずれ，天体は焼けうせてしまう。”としました。神様の日とはイエス様が再臨なさる日を指します。その日時は誰も知らないがイエス様は必ず再臨なさいます。イエスキリストの再臨は不信者達には盗人のように襲うが聖徒達にはそうではありません。イエス様が再臨なさる日時は知らなくてもその時が近づくことを見られるよう様々な兆しを聖書に予言しておきました。新たな天と新たな地にはイエスキリストの贖いの恵みを被った正しい者だけ生きるようになります。キリスト人とはイエスキリストの再臨を待ちこがれて生きていく人々です。
”どのような人になるのが当たり前か？”という質問に対して”あなたがたはこのような人になりなさい”とした聖書の節を探してその答えを調べてみました。救いを得た人になるべきです。主を喜ばせる人になるべきです。主の事に常に励む人になるべきです。神様の日が臨むのを眺めて懇切に慕う人になるべきです。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

物わかりのわるいものよ だれがあなたがたを惑わしたのか

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

信仰生活をそれなりによくしていた信者が、ある日、聖書的な信仰路線を捨てて、他の道に行ってしまうことが全くないのを、私たちが望んでいるが、これは過ぎるの期待です。使徒パウロもガラテヤの信徒たちの中に正しい信仰路線を捨てて他の道に行く者たちを見て嘆きました。なぜこのようなことが発生するかを今日の本文を中心に探して見ます

第一は、この世の誘いに落ちてキリストによる救いをなおざりに思って離脱した場合です。

聖書でこの世という言葉は、多くの意味で使用されています。したがって、この世という単語は、前後の文脈でその意味を分別しなければなりません。この世を愛したり、この世の誘いに陥ったという表現でこの世は聖なるのがない世俗の領域を指します。使徒パウロは、 テモテへの第二の手紙 4 章 10 節に記録するのを**「 デマス はこの 世を 愛し， わたしを 捨てて テサロニケ に 行ってしまい，」**としました。デマスはしばらくの間、パウロの同役者としての役割を果たしてきました。ところが、彼だけがこの世を愛して、パウロを捨てテサロニケに行ったのです。パウロは心痛むことであり、デマスには悲劇的なことです。この世の栄光、地位、権威、富の誘惑に導かれ、パウロを助ける神聖な任務を投げ出し離れました。
コロサイ人への手紙 2 章 8 節には、**「あなたがたは， むなしいだましごとの 哲學で， 人のとりこにされないように， 氣をつけなさい. それは キリスト に 從わず， 世のもろもろの 靈力に 從う 人間の 言傳えに 基くものにすぎない」と**しました。人間の哲学はむなしい欺きを警戒して断固として退けしなければなりません。人間の哲学は、人間から出てきたことです。人間の次元の低い哲学と学問的で救いを得ようとする行為は、まるで棒として月を取って部屋に取り付けて暗いを明らかにしようとするのと同じように虚しいことです。このような哲学と初等学問から罪の赦しと救いを得ようとすることが悪意はないかも知れなくてもむなしい欺きにすぎません。さらに異端の話は 欺き不正を持ったものです。略奪する行為です。
異端の話に誘いになる人は略奪を受けてしまいます。キリストによるの救いの祝福が何かを正しく知らずか、確信していないでいたので、この世の誘いに陥ることになるのです。キリストによる大きな救いに比べると、この世の栄光、地位、権威、富は大きな意味ではありません。キリストによる救いとは何かを知れば、この世の初等学問に過ぎない人間の哲学、思想に惑わされません。

第二には、律法を守ることで義なるとする、キリストの贖いによるの救いを信じる信仰から離脱した場合です。

今日の本文は、 **ガラテヤ**教会へのメッセージです。ガラテヤ教会はまだ霊的に幼い状態にありました。ところが、他の福音を伝える者が浸透して信仰を根底から揺さぶることをしました。教会に浸透した律法主義者がガラテヤの信徒たちに行った悪行は 2 つです。パウロが使徒ではないと蔑視することと、イエス・キリストを信じる者でも割礼を受けて、律法を守らなければ救われないと教えています。これらの都合に置かれたガラテヤの信徒たちに、パウロは自分の使徒職を弁証する一方、福音的信仰を堅持せようと手紙を送りました。
パウロは言った、**「それは 福音というべきものではなく， ただ， ある 種の 人々があなたがたをかき 亂し， キリストの 福音を 曲げようとしているだけのことである」と**しました。イエス・キリストの贖いによる救いの福音以外の福音があれば、それは福音ではない。したがって、福音を歪曲させる者は誰でも呪いを免れません。イエス・キリストを信じなくても善良で生きる救いを受けるとか、他の宗教にも救いがあると言う者は、すべてが偽のクリスチャンです。使徒パウロは、断固として言いました。**「しかし， たといわたしたちであろうと， 天からの 御使であろうと， わたしたちが 宣べ 傳えた 福音に 反することをあなたがたに宣べ 傳えるなら， その 人はのろわるべきである」（ガラテヤ人への手紙 1：8）** 福音は信じてもいい信じなくても良いのではありません。福音から離れば滅亡されます。
使徒パウロがアンテオケ教会にいるときに、使徒ペテロが訪問した時。異邦人の信者と一緒に食事をしていました。その時、エルサレムの教会に属している律法主義者たちがきました ペトロがその場所をそれとなく避けて行きました。ユダヤ人は異邦人と一緒に食事することを否定し考えました。このような態度は、福音に反することです。ペテロは福音を信じて伝える使徒です。したがって、アンテオケの異邦人の信者と一緒に食事しました。ところが、律法主義者たちが現れるとそのような姿を見せないようにしようと避ける二重態度をとっています。これを見て、他の信者ともアンテオケ教会を担任したバルナバまでペテロに沿って行いました。パウロは、このような光景を見て、人々の前で、ペテロを責めました。
ペテロがとった行動を見守った人々が、状況によっては、福音的信仰で離れ律法主義者として行動するのを分かると、彼らの信仰に毀損するクリティカルを与えるからです。パウロが公的に非難するしかなかった理由は、ペテロが公的に行動したからです。私たちは異端に接触している交友を発見したとき非難せず、教会にも通知しない場合、罪を犯す行為となります。福音的信仰の原則を毀損する行為は容認できません。
使徒パウロは言った、**「わたしたちは 生れながらの ユダヤ 人であって， 異邦人なる 罪人ではないが， 人の 義とされるのは 律法の 行いによるのではなく， ただ キリスト・イエス を 信じる 信仰によることを 認めて， わたしたちも キリスト・イエス を 信じたのである. それは， 律法の 行いによるのではなく， キリスト を 信じる 信仰によって 義とされるためである. なぜなら， 律法の 行いによっては， だれひとり 義とされることがないからである」（ガラテヤ人への手紙 2：15,16）**しました。イエス・キリストを信じることは、その恵みに完全に頼ることを指します。

ガラテヤ人への手紙 3 章 10 節には**「いったい， 律法の 行いによる 者は， 皆のろいの 下にある. 「律法の 書に 書いてあるいっさいのことを 守らず， これを 行わない 者は， 皆のろわれる 」と 書いてあるからである」**と記録された。律法が要求するのは、「誰でも律法に従ってあらゆることを、常に 「行うということです。ここで少しでも欠点があれば呪いを受けます。律法が要求するのが、このように徹底して完璧なものなので、律法に義とされることがないという事実が明らかです。ですから、イエス・キリストの贖いを信じる人の以外に義人はありません。
救いは、大きな代価と犠牲が支払われたものです。神の独り子イエス・キリストが代わりに律法の呪いを受けて贖いによって得られる恵みです。律法の要求に対しては全く無力で呪いの下にある人生のために、キリストが十字架にかかって、その呪いを担当しました。罪人に対する神の怒りと裁きを代わりに受けています。イエス・キリストを信じる信仰に何を添加しようとすることを警戒して排斥しなければなりません。キリストとして十分です。次に、律法は無用なのかという質問が生じます。
そうではないです。律法の役割があります。律法の役割の中で最も重要なのは、人は皆、罪人であるという事実を明らかに表す出してくれるでしょう。なぜなら、律法をすべて守ることができる人がいないからです。そして、人々が神のあわれみを望むようにして、最終的に私たちの罪を贖ったイエス・キリスト前に進むようにする役割をします。律法は罪を清めませんが、罪人の状態と罪人は律法をすべて守ることができないという事実と罪人に臨む審判と罰をお知らせします。
私たちが、人間の哲学、この世の 初等学問 、律法の行為によって救われるという教訓は、魅力的な面がありますが。このようなものの誘惑に引かれて行かないためには、十字架につけられたイエス・キリストを明らかに見なければなりません。本文に記録されたのを **「ああ， 物わかりのわるい ガラテヤ 人よ. 十字架につけられた イエス・キリストが， あなたがたの 目の 前に 描き 出されたのに， いったい， だれがあなたがたを 惑わしたのか」（ガラテヤ人への手紙 3：1）と**しました。福音の真理を受けた信者が疑似非異端に惑わされるのは、耳が薄いせいです。あがない信仰に固く立つ人々は異端疑似非たちの言葉にまったく関心を持ちません。
トマスが復活されたイエス様を直接会い告白するのを「私の主であり、私の神です」と言いました。するとイエスはトマスに言われ、「あなたは私を見たので信じるのか見ないで信じる者は幸いである」としました。復活されたイエス様を直接見なかったが、イエスが私たちの罪を贖いして十字架につけられ死なれ葬られたが、三日目によみがえられ天に昇られたことを信じている人は、幸いであります。

皆さんは世俗的なことがあなたを惑わすれば、**「 十字架につけられた イエス・キリストが， あなたがたの 目の 前に 描き 出されたのに， いったい， だれがあなたがたを 惑わしたのか」**と宣言してください。人間の哲学思想そして初等学問で誰があなたを**惑わ**すれば、「イエス・キリストが十字架につけられたのが私の目の前にはっきり見えるのに、なんの誰あえて私を 惑わすのでするか」と断固に対応してください。